

寄書

旅行日記の一節

夏 目 生

村の空さんが入營とかにて古びた明笛に紙張の太鼓村の小哥達調子怪しく夜更くるまで打ち鳴らす喧がしさに碌々夢も結ばれず心地あしきに曉方より打揚ぐる煙火の響は家もゆるがんばかり吃驚して孽より這ひ出づれば宿の婆さん「貴下まだ早う御座んすお就寢て仰在れば可御座んすのに」圍爐裏の傍に屈まり怪訝顔して此方を見返へる。

朝飯すまして軒端に出づれば、白霧迷々として山々を蔽ひ、暮れ行く秋の肌寒さは身に沁むばかり、家々には朝炊きの烟薄く靡きて、又何處よりか時を報る鷄の聲も聞ゆと見れば遠く山の端に二旒の旗を先に立て、續く大勢の人影は大方見送りの人々と首肯かれたり、今日も空模様あしければ吾は部屋に閉籠りて畫の修正にかゝりぬ。

頓て晝餉もすみて庭に立ち出づるにフと眼に入るは幾條となく繩に結びて屋根につるされたる百目梯なり、聞けば日々三四度は之れを揉むなりと、噫吾は是を耳にせぬ前に喰ひたかりしよ、其の他苔蒸したる屋根轉り合ふ名も知らぬ山鳥、遠近に刻む水車の音、藪越しに聞ゆる悠長な牛の鳴聲、さては野良に聞ゆる娘の鄙唄、總て都に馴れたる眼には見聞くもの仲々に興あり。山寺の鐘もの哀れに殷々と響き渡る其夕、さりげなく椽側に立てば、宿に隣れる馬小屋の側に、年頃十七八、新らしからぬ白

地の手拭を被り、盲縞の筒袖を着たるが、面相も艶麗花を欺くまでには至られど、鄙には相應はぬ乙女の、朋輩らしきに泣きつゝ語るあり、要らぬ事ながら好事にも本蔭に寄りて窺へば。

「昨日刈入れを了へるまで野良で行く末の事など楽しく語り合ひし懐かしい空さん、愈々明日の入營で、今朝は遠い都の空へ旅立つとか、さらぬだに思はしき繼母の嫁入話、噫思へば寂しい二歳の月日を妾はどうして暮そう、げに人の世の寂寥を一人で脊負て立つやうな氣がする今朝も甲府まで送らんと門に出づれば女郎メロの癖にと荒々しく母上に呼び止められ、先の婿殿へ濟むとか濟まぬとか、噫亡き母だに坐せば斯くも徒なくあるまじきに、我子の雪さんばかりは人の影口叩く程愛しみつ勞りつ、臺所の仕事一つもさせず、それに引替へ妾には逆も辛抱のしきれない様な仕向け、二口目には厭な顔をするとか、碌に返辭もしないとか、繼子根生が突張るとか、折に觸れ物に托けては出て行けがしの虐待それも空さんの慰藉によりて寧そもうとまで思つた事も胸を撫で、我慢もせしが、せめてもの恃みとせる父上はよからぬ道に耽りて家を外の道樂三昧、寄る邊なき身の遣る瀬なく思ひ詰めては寧そ死んで……」

と言ひ淀んで萎然と俛首れた。

今し野良婦へりとも見ゆる籠せおいたる女の頬かぶりしたるが語らひつゝ來るに、氣付きて慌てゝ姿を匿しぬ。

翌日の旦、軒端の清水に洗物せる宿の老婆に「お早うゴイス」と頓狂な聲を浴びせかけられ、今更氣の付きし様に「いゝお天氣

てゴイス」俛首れしまゝもの思はしげに鬢のほつれを搔ひなでながら行き過ぐるは、昨日見し果敢ない乙女：あはれ今御嶽山麓の田圃に彼女の俤を見る事が出来るてあるうか。

第二十二回師範、中學、高等女學校

教員檢定豫備試驗問題

▲圖 畫 科

△毛筆畫(三時間)

墨 畫

- 一、提燈の釣しあるものと下に置かれたるものとを畫け
但前者は軒下に釣したるものを下より斜めに見たるもの後者は床上にたゞみ置きたるものを上部より斜めに見たる處とす而して兩者とも提燈の上下の枠は黒色にして紙張の部は白色なるを以て全體の濃淡に注意して畫く事を要す

圖 案(着色)

- 一、丸形陶製の菓子皿の内部に左の題に依りて考案したる模様を畫け

題 蝶

但次項に注意すべし

- 一 模様は實物より便化したるものとす
- 一 菓子皿の直径は曲尺五寸五分とし其平面圖及立面圖を要す

一 立面圖は高さを隨意とし圖を折半して其一方に切斷面を示せ

△鉛 筆 畫(三時間)

一、「釣ランプ」と「置ランプ」とを畫け

但「釣ランプ」は天井に釣しあるものを下より斜めに見たる處とし「置ランプ」は床上に据えあるものを上部より斜めに見たるものとす

圖 案(着色)

- 一、丸形陶製の菓子皿の内部に左の題に依りて考案したる模様を畫け

題 蝶

但次項に注意すべし

- 一 模様は實物より便化したるものとす
- 一 菓子皿の直径は曲尺五寸五分とし其平面圖及立面圖を要す
- 一 立面圖は高さを隨意とし圖を半折して其一方に切斷面を示せ

■國語及び用器畫問題は次號に出す